

## 編集後記

令和2年度の年報をお届けします。この年は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大に伴い、大学業務の「充実」「推進」「整備」に「オンラインの活用」をキーワードとして進められてきたことが年報を編集していてもわかります。オンライン教育は東日本大震災後に文部科学省がその進展を掲げていたにも関わらず、なかなか進まなかったのが実状でしたが、このコロナ禍で全国的に一気に進みました。教育や学術団体の、例えば学術集会などの活動までもオンラインを活用して実施できないかと検討することが新しいスタンダードとなりつつあります。全国、いえ地球規模の健康課題がこれを進展させたのはなんとも複雑な思いですが、目標に掲げたほとんどは「オンライン」を活用し達成できたといえます。

その中でも、「学生の相談、支援体制の整備」に掲げた目標に触れたいと思います。大学は主体的に学習する場ですが、これはテキストを読み自分で勉強することではありません。社会性を身につける場でもあり、周囲の人と人間関係を構築しながら意見を交わし地域・国際社会に貢献する人材づくりを目指しています。ですが、目の前の教育サービスが一瞬で変わりました。隣で励まし合った同級生はいなくなり「自分も感染するのでは？」と根底にある不安を打ち消しながら、「オンライン」で教育サービスを受け、学生の中には、とにかくつらかった、死んだと同じ、と話す者もいました。学生のICT学修環境に配慮・整備する以外に、外部心理カウンセラーによるカウンセリング「ほっとルーム」の新設、Moodle（オンライン上の学習管理システム）内に学生相談窓口を新設し、その利用数から、学生も教員の心をも癒しサポートしてくれました。学生はオンラインを使って同級生だけでなく後輩と交流して励ますこともありました。詳細なことはお伝え出来ませんが、コロナ禍であっても躊躇されることなく、誰かの力を借りて助かることができ、笑顔に戻れた人もいたということに安堵感を覚えるばかりです。

一方、グローバル化の推進は大打撃を受けました。学生は仕方ない、といいつつ「海外の現地で学びたい」という思いを募らせています。「オンライン」を活用したツアーは来年度の海外研修の代替案として準備が進められています。少しでも学生の教育ニーズの役に立てればと思っていますが、以前より色々な理由で海外研修に参加できない学生のための国際教育プログラムが充実しなかったと改めて感じます。海外ではコロナ禍で「オンライン教育」に切り替わった時、オンラインシステムが利用できない、スマートフォンを持っていない子供たちが自殺する、というニュースがありました。コロナ禍であってもなんとか海外の人と交流する、だけでなく世界で起きているコロナ禍の教育への影響を調べ、将来どうなるのか、どうしたらいいのか、今どんな活動があるのかを知ることもコロナ禍におけるグローバル化として捉えられたら、と思っています。

最後に、緊張と不安な思いで激務化したフロントラインに最大の感謝を伝えたいと存じます。大学で教育に従事する教職員は医療従事者でもあることが多く、「これでいいのか」と苛まれる方もおいででしょう。「私たちは今、何をして国民を守るべきか、看護教育をとどまらせることなく、卒業生を輩出し医療の担い手を減らさないためにはどうすべきか。研究調査方法を変えて患者さんの問題を解決する方法はないのか。」気持ちを切り替え、オンラインを活用した調査方法やオンライン教育をした成果は、今後目の当たりにするでしょう。改めて日々教職員にはご自愛いただき、共に切磋琢磨し頑張っていきたいと願うばかりです。

本誌の編集にあたり各委員会、各附属施設の皆様から多大なご協力を頂きましたことにお礼を申し上げます。また、実質的な作業を担った平村主任主事、曾山委員の労をねぎらいたいと思います。皆様のご協力に感謝申し上げます。

自己点検・評価委員会 年報編集部会長 木森佳子